

# 中耳炎・外耳炎



監修&アドバイス  
笠井 創先生

かさい・はじむ◎笠井耳鼻咽喉科クリニック院長。医学博士。千葉大学医学部卒業後、国保君津中央病院耳鼻咽喉科医長、国立がんセンター一病院頭頸部外科医員などを経て、平成11年、東京都目黒区自由が丘に同院を開業。わかりやすい説明による安心感を抱く診察が評判。

笠井耳鼻咽喉科クリニックホームページ  
<http://www.linkclub.or.jp/~entkasai>

知っているようで意外と知らない、5～6歳児にありがちなことからだのトラブルについて、専門家の先生に聞いてみましょう。

## 中耳炎と外耳炎の対策として、 症状をきちんと知ることが大切

耳の病気で最も多い中耳炎と外耳炎ですが、鼓膜を境に内側に起こった炎症を「中耳炎」、外側に起こった炎症を「外耳炎」と呼んでいます。

外耳炎は強いかいたり、耳掃除をしたときなどに細菌に感染して起こります。軽症のうちにはかゆみだけですが、いじると悪化し、強い炎症と痛みを伴います。炎症は外から見てすぐわかることが多いですが、判断しにくい場合もあります。子どもが耳のかゆみや痛み、違和感などを訴えたら、速やかに耳鼻科を受診してください。特に治りかけはかゆみが増しますが絶対にいじらず、処方してもらったかゆみ止めの薬を使用し、つめを短く切って指先を清潔にしておくようにしてください。

中耳炎は鼓膜の内側にできる炎症で、主に「急性中耳炎」と「滲出性中耳炎」があります。鼻のぐずつきやせきなどの風邪症状のあと、耳が痛くなれば典型的な「急性中耳炎」です。滲出性中耳炎は風邪症状のあと、耳の聞こえが悪くなったり難聴が続き、中耳に水がたまる症状が特徴です。これは体内の分泌物がたまったもので、水泳などで耳に水が入ってしまったことが原因ではと誤解されるかたもいますが、外側から鼓膜の中に水が

入り込むことはありません。また水泳や入浴で中耳炎がほかの人に感染したり悪化する心配はありませんが、医師に相談のうえ行ってください。

外耳炎や急性中耳炎のようにはっきりした痛みがあれば、



受診をする目安にもなりますが、滲出性中耳炎に伴う難聴は少しずつ進行するため、気づかれないことも多いのです。しかし、難聴の症状は、幼年期の子どもにとって知的発達の妨げにもなりかねません。さまざまな言葉や音を耳で受け止め成長していく時期だけに、与える影響は大きく深刻です。「呼んでも反応が悪い」「テレビの音量を上げてしまう」「イライラしている」などお子さんの発するサインに気をつけてあげて、影響を最小限にとどめるためにも早期発見・受診を心がけてください。

## 中耳炎の治療法と 再発予防のための注意点

中耳炎の原因のほとんどは、風邪をひいた際にのどや鼻に残ったウイルスや細菌が耳と鼻をつなぐ管(耳管)を通して感染するためです。急性中耳炎が治りきらず、滲出性中耳炎になることもあります。またアレルギー性鼻炎や扁桃腺肥大の人は比較的なりやすいとも言われています。中耳炎の主な治療法は、まず原因になっている鼻とのどの治療をすることです。しかし滲出性中耳炎で難聴が進んでしまった場合、鼓膜を切開したりチューブを入れてたまった分泌物を抜く治療が必要になってきます。鼓膜は再生力が強いので、切開しても聴力に支障はありません。

中耳炎・外耳炎の再発を防ぐためには、何よりも鼻炎を完治させることです。特に子どもは耳管が大人に比べて太くて短く、ウイルスなどが入りやすいため、原因である鼻炎の完治は欠かせません。またうがいや手洗いをこまめにするなど、風邪をひかないよう気をつけることも大切です。中耳炎にかかったときは、鼻のかみ方にも気をつけ、無理にかんで症状を悪化させないようにします。じょうずに鼻をかめないお子さんは、今のうちから鼻を片方ずつかむ練習をさせておきましょう。